



『M i s a k o ・ 後編』

作者 大黒達也

一・ 作品紹介

凶悪無比なヴァンパイア集団と食人鬼のために、大黒と近藤が築いたパラダイスは音を立てて崩れ落ちた。六十人の美女達は、拉致され行方不明となる。

二人は、彼女達を救うべく立ち上がる。全編にカニバリズムの嵐が吹き荒れます。ご期待下さい。

二・ 登場人物

大黒 達也（オオグロ タツヤ）

大手コンピュータメーカーを首になり、ひよんなきつか

けから、美佐子率いるヴァンパイアの美女軍団を使つて、キャバクラを始める。空手や柔道など武道の達人

近藤 圭吾（コンドウ ケイゴ）

大黒の親友であり、元産婦人科の医師。大黒とともにキャバクラを経営する。剣道の達人

工藤 美佐子（クドウ ミサコ）

たぐい希な美貌と抜群のプロポーションを持つ女吸血鬼。大黒の妻となる。

大杉 美由紀（オオスギ ミユキ）

暴走族のメンバーだったが、大黒、近藤によって改心する。近藤の妻となる。

大石 真由美（オオイシ マユミ）

美佐子の妹的存在。同様に美しく、小悪魔的な娘

サムソン

身長三メートルを越す食人鬼。美女達を食って、食って食いまくる。

マリア

美貌と残虐な心を持った女戦士。サムソンとともに大黒達の前に立ちはだかる。バイセクシャルで、サデイズト。美しい娘が何よりも好物

三・ 目次

第一章 戦場

第二章 肉奴隷

第三章 極上の美味

第四章 潜伏

第五章 大暴走

第六章 復讐

『本編』

第一章 戦場

美佐子が助手席に乗り、大黒が運転するバンは、石狩湾新港を目指し国道を時速八十キロで飛ばしていた。時刻は深夜を過ぎており行き交う車は、疎らとなっていた。二人は言葉を交わすことも無く、ヘッドライトに照らし出される路面を見ていた。大黒は右手でハンドルを操作しながら、ミニスカートの隙間から左手を差込、股間を弄っていた。これから、敵地に向かおうとしている時に、激しいまでの性欲を感じていた。あるいは、逃げ出したくなるほどの恐怖心を、紛らわそうとしていたのかも知れない。

美佐子が、大黒の手を両手で握り締め、背筋を仰け反

らせるようにして果てた。少しの間、余韻を楽しんでいた美佐子が、大黒の男根をズボンから引きずり出した。数回激しく擦り上げ、パクリと咥え込んだ。敵のアジトはもう間もなくであつた。国道から脇道に入り、深い森の中の一本道を突き進んだ。

森が終わる頃に、目指すアジトが見え始めた。ゲートまで百メートルのところで、大黒は、車を路肩に寄せパーキングランプを点灯した。すぐ脇には、アジトの周囲をめぐる鉄条網が敷かれていた。股間で動いている美佐子の豊かな黒髪を掴んだ。突き抜けるような快感の中、美佐子の口内に放った。美佐子は喉を鳴らしながら、すべてを飲み込んだ。

二人はバンの後部席に移り、そこで着替え始めた。美

佐子はミニスカートとシャツを脱いだ。下にはピンク色のビキニを身に付けていた。大黒は美佐子のパンティを降ろし、臍に軽く口付けをした。香水の香りに混じって、若い女の素晴らしい匂いが鼻腔をくすぐった。

「どうしたの？ 怖い？」

「ちよつとしたおまじないさ」

それから、シャツの上に防弾チョッキを身に付けた。左脇のシオルダーホルスターに、レーザサイト付きのデザート・イーグル五十AEを差込み、各種弾装を入れたポーチを身に付けた。右膝にベルトを巻き、細身のガーバナイフを固定した。爪先を鋼鉄でガードした特製のジャングルブーツを履いた。

美佐子は、下着をすべて脱ぎ去り、全裸となった。頭

部を除く、全身がすっぽりと包まれる、黒い全身タイツを身に付けた。美佐子の豊満な裸身がくつきりと浮き上がり、セクシーさを一段と際立たせていた。防弾チョッキは着用しなかった。余分なものは、素早い動きの妨げとなるからだ。五十口径ライフル弾と四十ミリグラネード弾が詰まったポーチを背負った。大黒は、SPAS十二を背負い、M二四九を両手に持ちバンを出た。美佐子が、近藤の労作であるM i s a k o スペシャルを片手で持ち、後に続いた。二人はバンの影で、抱き合い激しい勢いで唇を求め合った。美佐子の唾液には、先ほど大黒が放った精液の残滓（ザンシ）が残っていた。二人は吹っ切るように離れ、互いにじっと見詰め合った。

「行くか？」

「ええ」

鉄条網を通して見える敷地内に人影は無く、ひっそりと静まり返っていた。美佐子は鉄条網の前で、腰を曲げ前傾姿勢を取った。大黒が、美佐子の背中に乗かった。

「しっかり、つかまっけてね」

次の瞬間、二人の身体は五メートルほど飛び上がり、二メートルの高さの鉄条網を飛び越していた。着地と同時に美佐子は、大黒を背負ったまま恐ろしい勢いで音も無く走り始めた。置き捨てられたブルドーザの残骸の影に、身を隠した。建物まで、三十メートルの位置に近付いていた。

「いるわ。オーグルの匂いがする」

美佐子が声を殺して囁いた。

「どの建物だ？」

「三棟の内の一様右よ。女達は他の棟にいるわ」

「そろそろ。時間だな。手筈どおり俺は雑魚どもを始末して、人質を救出する」

大黒がミリタリーウォッチを覗き込んだ。午前一時まであと数分しかなかった。一時ジャストに近藤達が、市内各所でダイナマイトを爆破させることになっていた。警察や消防が総動員される筈であった。その騒ぎに乗じて、ケリをつけるつもりだ。爆破地点は無人の場所なので、怪我人が、出る心配は無かった。

秒針が十二時を指し示すと同時に、札幌方向の夜空に閃光が發し、数秒後に地鳴りのような爆音が鳴り響いた。夜空が赤々と燃え上がった。三棟の内の一棟から、数人

の影が走り出した。夜空を燃やす炎が、凶悪な顔をした男達の姿を浮き上がらせた。何人かは、ショットガンや拳銃を手にしていた。男達は、札幌方向を指差し何かを叫んでいた。

「後でね」

背後から、美佐子の声が聞こえた。振り返ると既に美佐子の姿は無かった。

大黒が、ブルドーザの残骸から身を起こし、M二四九を腰ためにして引き金を絞った。ゴーという連射音がして、無数の空薬莢が宙に舞った。男達の身体に着弾した。男達は死のダンスを踊り、蜂の巣となり絶命した。男達が吹き飛ばように倒れる中、工場の扉が開けられ、ショットガンやライフル銃で武装した十人近い男達が走り出て

来た。皆、構内に置き捨てられたブルドーザやクレーン車の残骸の影に、身を伏せ応射してきた。一発の銃弾が、左肩を掠め鋭い痛みを感じたが、引き金を絞り続けた。自然に叫び声を発していた。

ブルドーザの影から攻撃していた一団を一瞬で葬り去り、二百発入り弾装を交換してから、クレーン車の残骸に向けて引き金を絞った。車体に着弾し眩い火花を發した。応射しようとして立ち上がった男の顔を五・五六ミリ弾の連射で粉碎した。大黒は、M二四九を連射しながら、クレーン車に向かって走り出した。

美佐子は、M i s a k o スペシャルをかまえ、工場内の通路をゆつくりとした足取りで歩いていた。周囲には旧式の工作機械が整然と立ち並んでいた。停止している

筈の機械はすべて動いており、機械がたてる騒音で工場内は騒然としていた。照明は無く、札幌方面で発生している火災の光が窓から差し込む程度であった。薄明かりをとおして、床が何個所か陥没しているのが見えた。直径三メートルほどの、かなり深い縦穴があいていた。床には刺激臭がする機械油が撒かれていた。さきほどから、自分に注がれる執拗な視線を感じていた。周囲の騒音と異臭のせいで、場所を特定することができなかった。

目の前をひとつの影が過った。美佐子はとっさに引き金を絞った。眩いばかりの閃光と、耳をつんざくような爆音とともに、目の前のベルトコンベアーが粉碎した。特殊炸薬入りの五十口径ライフル弾の威力は凄まじいものがあった。

美佐子は、粉碎し燃え上がるベルトコンベアーの残骸を、一気に飛び越えた。床に女が倒れていた。腹部が裂け内臓がはみ出していた。まだ息はあったが、意識は無く、激しい勢いで流れ出す鮮血とともに生命が消えかかっていた。

攫われた女達のひとり香織であった。何度か抱いたことがある。まだ二十歳になったばかりであった。美佐子は香織を抱きしめた。

「女はそのままにして置け、後で食うからな」

どこからか、地鳴りのような声が聞こえてきた。

「この野郎！」

美佐子は立ち上がり、周囲に向かって、五十口径弾をめくら撃ちに乱射した。

機械類や資材に命中し、爆音と共に粉碎した。外れた銃弾は、工場のコンクリート壁に大穴を穿った。美佐子は声を限りに叫びながら、弾装を交換し撃ち続けた。周囲に気を取られ頭上の異変に気が付かなかった。重量が数トンはある鋼材が、鎖によつて宙吊にされていた。

一発の銃声がして鎖を断ち切った。鋼材が唸りをあげて美佐子の頭上に落下した。美佐子は危険を察知し、横飛びに避けた。そこにある筈の床が無かった。美佐子の身体は陥穽の中に落ちていった。

サムソンがどこからとも無く現れた。腕には香織の死体を逆さまにして、抱えていた。深い尻の割れ目に顔を押し付け、アヌスを美味しそうに舐めていた。美佐子が落ちた穴の縁に近付いた。尻肉を噛み取りながら、ぽっ

かりと開いた穴の底を覗き込んだ。

「ゲームの始まりだ」

独り言を言い、香織の膾肉を食いちぎった。

美佐子は穴に落ちた時、後頭部を強打し一瞬の間、気を失っていた。鼻をつく異臭で覚醒した。数十メートル上に穴の入口が見えた。穴から差し込む微光でも、美佐子には周囲の状況が掴めた。広さは、三十畳ほどもあった。床には、数十もの、肉を削ぎ落とされた大腿骨や肋骨が転がっていた。ゆっくりと立ち上がり、全身をチェックした。数十メートルを落下してもなお、致命的な傷は負っていなかった。美佐子は頬に微かな風を感じた。その方向に歩き出した。骨を踏み付けながら進んだ。

岩肌が剥き出しになった壁に縦横、二メートルほどの横穴が開いていた。上ではサムソンが待ち構えている筈であった。横穴の奥の方から微かな光が漏れていた。穴に入ろうとした時、パタパタという羽音が聞こえて来た。すぐに真っ黒な塊が、疾風のように美佐子の周囲を通り過ぎていった。

蝙蝠の大群であった。目を守るために顔を手で覆った。危うく悲鳴を上げそうになった。それらは、やって来た時と同様に、急にいなくなった。気を取り直し、横穴を進み始めた。岩肌が剥き出しとなり、じめじめとした通路を、前方から漏れてくる光を頼りに二十メートルほど進んだ。その先は行き止まりになっていた。コンクリートによって塗り固められていた。地下水のせいだろうか、

風化が進んでおり、ところどころにひび割れができていた。光はそこから漏れていた。美佐子は力まかせに壁を蹴り付けた。ガツンという衝撃音と共に倒壊した。そこは、三十畳ほどの広さがある部屋となっていた。少し前まで人がいた気配を感じた。それも複数の女だ。何種類かの香水の香りを嗅ぎ取っていた。天井から数十本の足が吊り下げられていた。形からして女の足であることはすぐにわかった。それらは太腿の部分で切断されていた。美佐子は攫われた女達の末路を思い知った。足以外の部分、調理されて食われたのは容易に想像することができた。部屋の隅には、高さ一・五メートルほどのガラスでできた壺が、数個置かれていた。中には、女の全裸死体が透明な液体の中に浮かんでいた。蓋を開けてみた。

濃厚なアルコールの匂いが鼻腔を刺激した。

一方、大黒は、攫われた女達が監禁されている棟に入っていた。M二四九は弾切れのために廃棄していた。

今はSPAS十二の銃床を握り締め、無人の食堂を探索していた。敵の気配は感じられなかった。食堂を後にして、非常灯の薄明かりをたよりに、廊下を奥に進んだ。

突当たりにある扉を開けた。湯気が顔に吹き付けられた。そこは、中央にプールほどの広さがある浴槽を配した大浴場であった。

蛍光灯の照明が内部を、煌煌と照らし出していた。湯気の中に白いものが蠢いているのを確認した。じっと目を凝らした。三人の女達が浴槽の中で絡み合っていた。

そのうちのひとりの顔には見覚えがあった。攫われた女達のひとり、佐伯理佳であった。二人の白人女が、理佳を浴槽の中央に立たせ、前後から片膝について膣やアヌスを舐めていた。理佳は立っているのも辛いらしく、女の肩に両手を突いてもたれかかっていた。

「あんたも犯るかい？」

アヌスを舐めていた女が、愛液にまみれた顔を上げた。目と目があった。女はおどけたようにウィンクを返した。大黒が、咄嗟にSPAS十二をかまえた時、白いものが飛んで来た。理佳の裸身だった。ふたり折り重なるように床に倒れた。理佳は憑かれたような目付きをして、大黒のズボンを脱がせようとした。大黒の肘撃ちが理佳のコメカミを直撃した。失神した理佳を何とか引き離した。

立ち上がり、二人の白人女の姿を捜し求めた。二人の姿は掻き消えていた。背後に異様な気配を感じた。振り向きざまに発砲した。先ほどの白人女のひとりが、腹を爆発させ内臓を撒き散らしながら、壁に激突した。

「この野郎！」

浴槽の中央に大きな水飛沫があがった。もうひとりの女が、湯の中から飛び出し、弾丸のような速さで大黒の頭上に躍り掛かった。

ドカン、ドカン、ドカンという連射音がして、天井に大穴を開けたが女の身体にはかすりもなかった。咄嗟に床に伏せた。女の身体が頭上を飛び越え、壁に激突した。ガツンという音を立ててコンクリート製の壁を突き抜けた。

腹を撃たれ瀕死の女が、大黒の目を盗む様にして、失神している理佳に、にじり寄って行つた。理佳の首筋を噛み裂き、流れ出る鮮血を喉に流し込んだ。

出血が止り、見る間に破壊された内臓が再生していった。

大黒は、大穴が開いた壁にSPAS十二で狙いを付け、じつと見詰めていた。

「さつきはよくもやってくれたね」

腹を撃たれて女が、壁にもたれかかり大黒を睨み付けていた。女に一瞬気を取られた隙に、前方から女が突進してきた。引き金を引こうとしたが間に合わなかった。女の身体がふわりと浮き上がり、大黒の顔を太腿で挟み付けた。衝撃で二人は浴槽の中に落ちた。

湯の中で、女は太腿で頭を、万力のような力で締め上

げた。顔じゅうが女の膣で覆われている感じだった。窒息のため意識が薄れかけていた。大黒は口を開け、思いつきり女の膣肉に噛み付いた。一瞬、女の力が抜けた隙に身体を引き離し、なんとか立ち上がった。女の動きの方が速かった。前屈みになって、ゼイゼイと苦しそうに呼吸する大黒の股間をズボンの上から弄った。ジッパ―を引き降ろし男根を掴み出した。

大黒が持っていたSPAS十二の銃床で女の顎を殴り付けようとした。女は軽く躲し、軽いカウンターを見舞った。大黒はSPAS十二の銃身で受けた。ガツンという音がして大黒の身体が宙を舞った。SPAS十二の銃身が真二つに折れていた。女は浴槽に浮かぶ、大黒の剥き出しとなった股間を踏み付けて湯に沈めた。大黒は

一瞬の間、気を失っていたようだった。目が覚めると湯の中にいた。男根を足で踏み付けられていた。握り締めていたSPAS十二の残骸を離し、ショルダーホルスターのデザート・イーグル五十AEに手をかけた。

「そろそろ、止めないと男が死んじゃうよ」

壁にもたれかかり、動けないでいる女がからかうように言った。

「こいつけっこう好みのタイプなんだよ。こういう男をいたぶるのが趣味なんだ。それに、アタイのオマ＊コ噛んだんだよ」

大黒を押さえつけている女は、感触を楽しむかのよう
に足先を動かした。

「エバ、何だか様子が変だよ」

「何？」

水中から一筋の赤い線が、伸びていた。それがエバと呼ばれた女の裸の腹に、赤い光点を描いた。徐々に上がりに出た。ガツンという衝撃音がして大量の水飛沫が上がり、エバの頭部が破裂した。勢いよく大黒が湯から飛び出して、苦しそうな息を吐きながら、デザート・イーグルをかまえ、周囲を見渡した。

首無しとなった女が目の前に浮かんでいた。デザート・イーグルが火を噴いて女の腹を引き裂いた。周りは血の海となっていた。

大黒はゆっくりと浴槽から出て、壁際で蹲っている女に近付いた。女は腹部に受けたダメージから完全に回復していないようだ。女の近くで首から血を流し倒れている

る理佳の手首をとり、脈を計った。既に絶命していた。

「真由美は何処だ？」

大黒が女の顔に狙いを付け、絞り出すような声で言った。

「知らないね。知っていても言う気は無いよ。どうせ殺すんだろう？」

「女は殺さない主義だ。例外はあるな。無抵抗な女を殺すつもりは無い」

大黒は浴槽に浮いている血塗れの死骸をちらりと見詰めた。

「ハハハハ……。あんた大黒さんとか言ったよね。甘いね。そうだ。どうせ殺されるんならあんたのマラを吸わせてよ。気が変わるかもね」

大黒は男根が剥き出しのままになっていることを忘れていた。女の淫らな視線が絡み付いていた。

「噛み切られるのは御免だ」

「真由美の居場所と引き換えでも？」

大黒は正直いつて困り果てていた。見当がまったくつかなかった。

「妙な真似はするなよ」

大黒は女の前に立ち、銃身をコメカミに押し当てた。女は、大黒のズボンとパンツを降ろし、男根に食らいついた。喉の奥に飲み込み、音を立てて吸った。大黒のアヌスに指先を忍び込ませ、中を掻き回した。女は時折、妖しい光をたたえた目で大黒の顔を見上げた。心底からフェラチオを楽しんでいるように見えた。女の口の動き

がいつそう速くなった。大黒は限界に近付いていた。女の頭を押さえつけ、高ぶりのすべてを喉の奥に放出した。男根を強く吸いながら、すべてを飲み込んだ。

「美味しかったよ。あんたのが、これまで食べた中で一番美味しいよ。……真由美は隣の棟にある一階の部屋に監禁されているわ」

「元気なのか？」

大黒はズボンを上げながら言った。

「マリアというあたい達のボスのペットよ。毎日のようにオマ＊コ舐められて、いきどおしの筈よ」

「お前も抱いたのか？」

「いい身体しているし、顔も最高だからね。何度も逝かせてあげたよ」

大黒は立ち上がり、女に背を向けた。

「殺さないのかい？本当に甘い男だね。アタイの名はシ

ーナ。覚えておいて」

大黒はそれには答えず、大浴場を後にした。

美佐子は、地下の「食料貯蔵庫」を後にして、非常灯の薄明かりを頼りに廊下を歩いていた。前方から光が漏れていた。ドアが半場開けられた部屋に辿り着いた。中から濃厚な血臭が漂って来た。銃をかまえながら、中に踏み込んだ。部屋の中央に、全裸姿の若い女が、テーブルの上でうつ伏せになっていた。首筋に手を当ててみたが、脈は感じられなかった。手首や足首には押さえつけられ

た時にできたと思われる痣が浮かんでいた。目を見開き、苦悶の表情を浮かべた女の顔には見覚えがあつた。OLの三神レナだつた。グラマーな肢体の持ち主で、顔もモデルのように美しかった。レナの盛り上がった尻の割れ目から、血が流れ出していた。アヌスが、切り取られ出血していた。近くに置かれたバケツには、血塗れの腸が詰まっていた。レナは、ここで生きたままアヌスを切り取られ、腸を掴み出されたものと思われた。手足についた痣や苦しみに満ちた死相が、それを物語っていた。テーブルの脇には、高さ一・五メートルほどのガラスでできた瓶が置かれていた。中には焼酎が満たされていた。食料貯蔵庫で見た物と同じであつた。

敵は完全に狂っていた。女達を豚や牛等の家畜としか

扱っていない様であった。真由美やアリサのことが心配だった。美佐子は、不安を拭い去るように首を振り、部屋を後にした。廊下に出た時、微かな物音がした。氷のような殺気が廊下の奥から伝わって来た。M i s a k o スペシャルを、廊下の奥の暗闇に向けた。引き金を絞りながら奥に向かって駆け出した。コンクリート製の壁や床を、震わすような連射音が、廊下に響き渡った。

廊下の奥は、広さ百畳ほどの部屋へと続いていた。部屋の隅に置かれたテーブルには、乳房や尻肉を噛み取られた香織の死体が横たわっていた。美佐子が、そのテーブル近付こうとした時、頭上から気を失いそうになるほどの強い殺気を感じた。ゆつくりと上を見上げた。五メートルほど高さがある天井に、サムソンが張り付いてい

た。それは巨大な蜘蛛を連想させた。サムソンの口が大きく裂けた。乱杭歯からは大量の唾液が零れ落ちた。美佐子は悪鬼を思わせるサムソンに向けて、引き金を絞った。耳をつんざくような爆音とともに、コンクリート製の天井が倒壊した。大量の土砂が崩れ落ちた。美佐子は間一髪之差で、廊下に転がりこんだ。部屋の照明は、天井の倒壊とともに破壊され、廊下から差し込む非常灯の微かな光が頼りであった。

立ち上がり、土砂が堆く積まれた部屋の中央に向けて、四十ミリグラネード弾を発射した。目も眩むような閃光とともに、大地を揺るがすような爆音がして、大量の土砂が舞い上がった。天井の倒壊がおさまったのを、見極めてから、背負っていたポーチから照明弾を取り出して、

部屋の中央に向けて放り投げた。

床に転がり、次の瞬間、眩いばかりの光を發し燃え上がった。天井の中央部分が倒壊し、ぽっかりと黒い穴が穿たれていた。照明弾は、三分間は持つ筈であつた。部屋の中央に溜まつた土砂を登り始めた。どこにもサムソンの気配は感じられなかった。土砂は二メートルの高さまで積み上げられていた。体力には自信があつたが、緊張の連続で軽い疲れを感じていた。頂上部に座り、辺りを見回した。

「いい香いだ。味も最高だ」

地鳴りのような声が、尻の下から聞こえて来た。生暖かい物がタイツ生地の上から、臍に押し付けられていた。

「キャッ！」

悲鳴を發し、飛び上がった。頂上部分が爆發し、土砂が巻き上がった。三メートルを超すサムソンがすぐ目の前に立ち、見下ろしていた。銃をかまえた時、鞭のように撓る回し蹴りを腰に受け、土砂の山を転げ落ちた。床に頭部を強打し、ふらふらと立ち上がった。軽い脳震盪を起こしていた。ぼやけた視線の中に浮かび上がるサムソンに向けて引き金を絞った。弾は大きく外れて壁に大穴を穿った。サムソンは美佐子の頭上を飛び越え、背後に着地した。

「いい女だ。ケツも最高にいい形をしている」

美佐子は振り向き様に、五十口径ライフル弾を連射した。サムソンの動きは速く、ヴァンパイアの反射神経を持つていても、捕捉するのは容易なことでは無かった。

部屋の中を飛び回るサムソンに無駄弾を費やすばかりであつた。五十口径弾が切れ、引き金を引く音だけが虚しく響いた。

サムソンの巨体が一転して、弾丸のような速度で襲い掛かつて来た。美佐子はそのチャンスを待っていた。Missakosペシャルには、まだ四十ミリグラネード弾が一発残っていた。ガツンという衝撃音とともに四十ミリグラネード弾がサムソンの上半身に向け放たれた。サムソンが両手で胸から上をガードした。耳を劈くような爆音とともにサムソンの巨体が吹き飛んだ。コンクリート製の壁を突き抜けていった。さすがの美佐子も、恐怖のためにサムソンの生死を確認することはできなかった。弾薬はすべて使い尽くしていた。美佐子は元来た廊下を

戻り始めた。

大黒は、シーナに言われたとおり渡り廊下を通り、隣の棟に進入していた。廊下伝いにドアが並んでいた。大黒は、デザート・イーグルを右手にかまえながら、一部屋づつ確認して行った。どの部屋も無人だった。五つ目の部屋には鍵がかけられていた。大黒は耳をドアに近付け中の様子を伺った。何も聞こえてはこなかった。意を決し、ドアを一気に蹴り倒した。目の前に白く丸いものが見えた。それは蠟燭の薄明かりに浮かび上がった女の尻だった。女が広大なダブルベッドで、全裸になり、四つん這いの姿勢でドアの方に、染み一つない美しい尻を向けていた。自慰をしているようで、ベッドに顔を押し

付け、股間を手で弄っていた。大黒は女にデザート・イ
ーグルを向けながら近付いた。女が顔を上げ振り向いた。

「真由美なのか？」

大黒が上擦った声を上げた。

「達也なの？」

真由美のどこか虚ろな声が響いた。大黒は、ベッドに
腰掛け、真由美の上半身を抱き起こした。首に金属製の
ベルトが巻かれ、そのベルトからは鎖が伸びており、コ
ンクリート製の床に固定されていた。

「アリサはどうした？」

「知らない。何もわからない」

真由美は首を横に振った。

「とにかくここから逃げるぞ」

「待って。その前に私を抱いて」

真由美は甘い声で囁いて、大黒の股間をズボンの上から摩り上げた。

「わかった。ここから逃げ出したら好きなだけ抱いてやる」

「今抱いて。ねえ。お願い」

「どうしたんだ？真由美。さっきから変だぞ」

「抱いてくれないんなら、私は行かない」

大黒もヴァンパイアの真由美を力づくで、連れて行く自信は無かった。

「わかったよ」

それを聞いて、真由美は目を輝かせ、大黒の衣服を脱がせ始めた。大黒を全裸に剥いて抱き付いてきた。ベッ

ドの隅に置いてあったデザート・イーグルが床に落ちて大きな音を立てた。真由美の白魚のような手が大黒の男根を擦り上げていた。それだけでいきそうになった。その時、廊下から複数の人間がたてる靴音が聞こえて来た。

「真由美。敵だ。離すんだ」

「私ね。蛇が嫌いなもの。蛇に犯されたのよ。何度も」

「何言ってるんだ。早く離してくれ！」

「お姉さまに言われたの。達也を捕まえたら、蛇に犯させないと……」

「真由美！目を覚ませ！」

「ボタン」という音がしてドアが開け放たれた。三人の

白人女が、戸口に立っていた。

「よくやったわね。真由美。ご褒美をあげるわね」

「パトリシア様、お姉さまは？」

「マリアは、今、極上の雌豚を捕まえるのに忙しいんだ。

さあ、こっちにおいで」

パトリシアは床のフックに固定された鎖を、鍵で外した。真由美は、大黒を離し、夢遊病者のように立ち上がりベッドを降りた。床に四つん這いになって、パトリシアの足元に近付いた。パトリシアは、床に膝を付いて真由美の盛り上がった白い尻を撫で回した。

「本当に聞き分けのいい娘だね。お前の柔肉を食らうのが楽しみだよ」

「食べて。真由美のオマ＊コを」

真由美はそう言うなり、床に横たわり片足を上げた。陰毛を剃られ、剥き出しとなったサーモンピンクの膣が、

丸見えになった。パトリシアは真由美の股間に顔を押し付け、膣を舐め始めた。大黒は、ベッドに横たわり、放心した表情で、気持ちよさそうに動く真由美の尻を見詰めていた。

「メリッサ。こっちはどうやって料理する？」

「まずは、チ＊ポコをしゃぶらないとね」

「じゃあ、あたいはケツの穴をほじくってやろうかね」

二人の女は淫らかな笑みを浮かべながら、大黒の身体に覆い被さって行った。大黒は目を閉じた。真由美を思い通りに操っているこの女達もヴァンパイアであることは明白であった。武器を失った今、為すすべは無かった。

男根が女の口に咥え込まれ、アヌスに指を入れられ掻き回された。生暖かく柔らかい舌先で亀頭の付け根を刺激

された。睾丸を、音を立てて吸われた。

真由美があげる鋭い喘ぎ声が、聞こえ始めた。男根が意に反して反応を示し、女の口の中で大きくなった。知らぬ間に女の口の動きに合わせて、腰を振っていた。

先ほどから、美佐子は、追手の気配を感じていた。微妙ではあるが、複数の靴音が背後から迫っていた。地下の食料貯蔵庫に何とか逃げ込んだ。

ドアの向こうから、話し声が聞こえてきた。美佐子は、
M i s a k o スペシャルを床に置いた。銃弾はすべて撃ち尽くしていた。

「弾切れのようだね」

戦闘服を着て、期待に顔を輝かせたマリアが戸口に現

れた。ゆつくりとした足取りで、美佐子の方に向かって歩いて来た。同じ戦闘服に身を包んだ女達の一団が後に続いた。

「どうしてあたい達が武器を使わなかったかわかるかい？生け捕りにして楽しむためさ」

女達の視線が、タイツ生地をとおして浮き上がる乳房の膨らみや下腹部に注がれていた。マリアは、美佐子のこんもりと盛り上がった下腹部を、食い入るように見詰めていた。美佐子は心臓の動悸が激しくなっていた。攻撃に備え身構えた。

「素手であたいと勝負しようというのかい？」

背後で佇む女達の間にも、冷やかな笑いが広がった。「いい度胸だ。お前の両足も、生ハムにしてやるからね」

天井に吊るされた、女達の足で作った生ハムを指差した。美佐子ちらりと天井を見上げた。その隙に、マリアの姿が掻き消えた。一瞬の後、美佐子は背後から羽交い締めになれ、首筋を舐められ乳を揉まれた。美佐子は後頭部でマリアの顔面を強打した。怯んだ隙に、一本背負いを食らわせた。床に倒れたマリアの首を絞めようとしたが、逆に腕を引かれ、床に転がされた。二人はすぐに立ち上がった。

「なかなかやるね」

マリアは口元から零れ落ちる血を手の甲で拭い、薄ら笑いを浮かべた。

「オマ＊コを舐めるのが楽しみだよ」

マリアは両腕を垂らし無防備な体勢で近付いた。美佐

子が鞭のようにしなる回し蹴り放った。数トンの衝撃力を片腕で軽く受け流した。

「そんなものかい？じゃあ、こっちの番だね」

左正拳を美佐子の腹部にのめり込ませた。

「うつ……」

と呻き声をあげ、前屈みになった美佐子のコメカミに手刀を見舞った。衝撃でうつ伏せに、倒れ込んだ美佐子に馬乗りになり、一気に首を絞めあげた。美佐子の顔がみるみるうちに蒼白になり、すぐに全身から力が抜けた。失神した美佐子のタイツ生地のスーツに、手をかけ一気に筆り取った。目の前には、極上の白い裸身が横たわっていた。

「どうだい。このケツ。涎が出てきたよ」

マリアは深い尻の割れ目に顔を押し付けた。若い女の
素晴らしい香を楽しんだ。

「マリア。おっぱいを拝ませてよ」

まわりの女達が催促した。

「しょうがないね」

美佐子の裸身を裏返しにした。寝ていても崩れない乳房
と下腹部の茂みに女達の視線が集中した。マリアが無防
備な膣の茂みを指先で掻き分けた。

「きれいなピンク色だよ。見てご覧」

女達が一斉に覗き込んだ。マリアが指先を膣に差し込
み、掻き回した。他の女達は盛り上がった乳房の感触を
口や手で楽しんだ。白く柔らかい乳房に女の指が食い込
み、弾力を味わうかのように揉みしだいていた。揉みな

がら乳首を口に含み、舌先で転がした。アヌスにも指を入れられ掻き回された。美佐子の肉体は、女でも魅了せずにはいられぬほど魅惑的だった。

「マリア。もう我慢できないよ。こいつを食わせて」

女が美佐子の首筋に食らいつこうとした。

「待ちなよ。楽しみは後に取って置くものだよ」

マリアは氣を失った美佐子を抱き上げた。一行がその部屋を立ち去ろうとしたその時、戸口に巨大な影が現れた。前屈みになってサムソンが部屋に入って来た。右手で、左手の付け根を押さえていた。

「このアマ、俺の左腕をふっ飛ばしやがった。やっと捜し出して、くつつけたが回復するまでに二、三日はかかるな」

「サムソン。今は、この女を食べては駄目よ。いいわね。」

最後には極上の柔肉を食べさせてあげるから」

「ああ。わかったよ。後で、夜食を連れて来てくれ。お

っぱいが、でかい奴がいいな」

「わかったわ。サムソン。大人しくしているのよ」

マリアは子供に言い聞かせる様に言った。

第二章 肉奴隸

美佐子は、天井から降ろされた鎖に両手を縛られ、全裸で吊り下げられていた。爪先がcaろうじて床につく程度であった。周りには腰に張形を装着したヴァンパイアの女達が佇み、美佐子の盛り上がった乳房や尻を、食い入るように見詰めていた。これから女達によって捌られ、犯されるのだ。その果てに切り裂かれ血を吸われた後に貪り食われる運命であった。その光景が脳裏に浮かんでは消えた。己が運命に戦慄を覚えた。激しい尿意を覚えていた。誰かが背後から近付いて来るのを感じた。一糸も纏わず、股間に凶凶しい感じのする張形を装着したマリアだった。マリアは先ほどから、天井から吊るされた美佐子の後ろ姿を、舌なめずりしながら見詰めていた。

年の頃は、自分と同じくらいであった。透けるように白い素肌には沁みひとつなく、引き締まったウエストから盛り上がったヒップへと続くラインは、女から見ても惚れ惚れするほどに美しかった。

真由美の裸身も、美しくはちきれんばかりに瑞々しいものであったが、それに加え冒しがたい気品を秘めていた。これから、このお尻を思う存分犯すことができるのだ。快感に身悶えし、泣き叫ぶまで犯し抜くつもりであった。



マリアは、美佐子の背後で、膝間ついて深い尻の合間に顔を入れた。膣からアヌスの間をなぞるように舐めた。

若い女の素晴らしい香と味を楽しんだ。立ち上がり、背後から羽交い締めにするように抱きしめた。冷たくすべすべの素肌が、心地よかった。盛り上がった乳房を鷺掴

みにして、思う存分に揉みしだいた。黒髪に顔を埋め、
香しい匂いを嗅いだ。片方の手を下に下げていった。陰
毛を弄り、臍に指先を忍び込ませた。そこはじんわりと
濡れていた。

「もう感じているのかい？」

美佐子の耳に口を付けるようにして囁いた。

「……」

「本当に淫乱な女だね。もっとよくしてあげるよ。夜は
長いからね」

蹴るように言いながら張形の亀頭部分を、アヌスに押し付けた。

「こつちも処女じゃないんだろう？」

腰を押さえつけ、一気に差し込んだ。

「うつ……。お願い……。そっちは許して……」

「何言っているやがるんだい。お前の身体はもう、あたいのものなんだよ。何したって自由さ。今すぐに引き裂いて食らったっていいんだ」

腰を前後に、アヌスの奥を抉るように動かし出した。美佐子は美しい額に、皺を寄せ必死に耐えていた。パトリシアが美佐子の前に膝間付き、膣に口を押し当て、音を立てて吸い始めた。疼くような快感とともに、尿意がますます激しくなっていた。

「お願い。トイレに行かせて！」

「小さい方かい？」

美佐子は、アヌス張形で犯されながら大きく頷いた。

「それじゃあ。ここでするんだね」

「……」

「お前のオマ＊コ舐めているパトリシアはね。若くてきれいな女の小便をのむのが趣味なのさ。遠慮しないでぶっかけてやりな」

パトリシアは臆から口を離し、上を向いて口を大きく開けた。期待のためか瞳が輝いていた。

「どうしたんだい。早くしな！」

マリアは美佐子の腹部を、強く揉んだ。

「止めて！出ちやう！ああ……あ……」

美佐子の股間から、小水がシャワーのように流れ出した。パトリシアは口で受け、喉を鳴らし飲み込んだ。飛沫がパトリシアの美しい顔を汚した。

「うん。いい味だね。マリア。もう我慢できないよ。こ

の女のオマ＊コ食らわせて」

「まだだよ。我慢おし。後で真由美の肉をたとえ食わしてやるから」

その部屋にいた女すべてが、美佐子の裸体に殺到した。凶凶しい張形で身体中の穴という穴を貫かれた。口や手で身体中を、しゃぶられ撫で回された。女達による執拗で巧みな愛撫によって、快感が揺り動かされていた。身体の芯に疼くような高ぶりを覚えていた。マリアの腰の動きに合わせて尻を打ち振った。これまでに感じたことが無いほどに強烈な快感が、背筋を走り抜けた。美佐子は、声を限りに泣いていた。膣から愛液が滴り落ちていた。マリアに背後から首を回され、舌を吸われた。一気に絶頂へと上り詰め、身体が宙に浮くような感じから、

意識がストーンという感じで暗い闇へ落ちていった。

美佐子は、顔に生暖かいものが降り注ぐ気配で、目が覚めた。

「キャッ！」

目の前にサムソンの巨大な顔が、あった。

「よう。別品さん。お目覚めそうですね。この間は、どうも。危うく片腕になるところだったよ」

サムソンが楽しそうに笑った。美佐子はテーブルの上に、全裸で横たえられていた。サムソンが美佐子の首と、腰を両手で押さえつけた。まったく身動きが取れなかった。口が耳元まで裂け、乱杭歯から大量の涎が零れ落ちた。

「おっぱいが美味そうだ」

「お願い。止めて。食べないで！」

サムソンの巨大な口が、寝ていても崩れない盛り上がった乳房に近付いてきた。乳房のひとつが、サムソンの口に含まれた。もぎ取られそうなほど強い力で吸われた。もう一方の乳房も口に含まれ、音を立ててしゃぶられた。いつガブリとやられるか気が気でなかった。

暫くして、裏返しにされた。サムソンは美佐子のアヌスに鼻を押し付け、匂いを嗅いだ。分厚い舌で股間を舐め上げた。暫く感触を楽しんでいた。

「デザートの時間だ」

サムソンはテーブルの上に置いてあったボールから、生クリームをヘラで取り出し美佐子の全身に塗りたくっ

た。ゆっくりと時間をかけて、生クリームを塗られた美佐子の全身を舐めた。

調理担当のパトリシアは、自室に厨房と処置室を持っていた。処置室は、捕虜の女達を調理する前に、体毛を剃り落とし、腸内を洗浄する場所であった。

床はリノニウム製で水はけがいいので、女達を丸洗いできた。

今、その部屋に真由美が、入れられていた。部屋中央に置かれた金属製のテーブルに、うつ伏せの姿勢で足を拘束されていた。真由美の盛り上がった白い尻に張形を装着したパトリシアが乗っかり、腰を前後左右に振りたくっていた。膣の奥を突かれる度に真由美は美しい

額に皺を寄せて、鋭い喘ぎ声をあげた。口元からは涎が零れ落ちていた。

「残念だったね。真由美。助けにきたお仲間が捕まったよ。それであんたは用済みになったと言うわけ」

真由美は、首を後ろに回し、惚けたような顔を向けた。
パトリシアによって一時間ほどまえから三度も逝かされていた。今はクリトリスを指先で弄られながらアヌスを張形で掻き回されていた。張形のもう一方は、パトリシアの膣に深く刺し込まれていた。先端のバイブが子宮の奥深く快感を送り込んでいた。

「あたいは、もういきそうだよ。お前もいくんだよ。真由美。ああ……いい……」

両手を真由美の下腹部に差し込み、クリトリスと膣を

激しく掻き回した。

「ああ……お姉さま。そこよ。いい……。よすぎる！」

二人は鋭い喘ぎ声をあげながら、絶頂へと上り詰めていった。暫くの間、二人はテーブルの上で折り重なるようにして余韻を楽しんでいた。パトリシアが立ち上がった。

「そろそろ準備しないとね」

独り言を言い、テーブルの引き出しから、極太の浣腸器を取り出した。先端部分を真由美のアヌスに差し込んだ。ゆっくりと中身を挿入していった。

「ああ……。あ」

真由美は目を閉じてじっとしていた。浣腸などは日常茶飯事だった。今は浣腸され苛められることさえ快感に

なっていた。パトリシアは、アヌスに尿瓶の口を付け、
膣を指先で犯しながら、讃美歌を口ずさんでいた。堪え
られない排出感とともに、パトリシアの指の動きによっ
て再び快感が湧き上がってきた。

「お姉さん。もう駄目。出していい？」

「もう少し我慢おし」

パトリシアは指先に力を込め、膣の内壁を擦り上げた。

「もう駄目。真由美。いっちゃう！」

真由美は背筋を剃り返し、手足を突っ張った。その瞬

間、尿瓶の中に液状の糞尿が、迸った。

「そんなによかったのかい？」

パトリシアは、真由美の下半身にシャワーをかけ洗い

流し、部屋の片隅にあるシンクに、尿瓶の中身を捨て、

水で洗い流した。二本目の浣腸器を取り出し、中身を全部、アヌスに注ぎ込んだ。今度は指先でクリトリスを刺激しながら、空いている方の手で、重たげな乳房を揉みしだいた。

数分後、真由美の鋭い喘ぎ声とともに、さっきよりも薄目の糞尿が噴水のように吹き出した。パトリシアは、真由美の全身にホースで湯を注ぎかけ、糞尿を洗い流した。その後、浣腸と排泄が何度も繰り返された。

大黒は、女達のひとりであるシーナの部屋に捕らえられていた。全裸にされ、ベッドに座らされていた。股間でシーナの手が金髪を蠢いていた。男根を飲み込まれ音を立てて吸われていた。既に二度、口でいかされていた。射精のたびにアヌスを舐められ、再び勃起したところをし

やぶられた。シーナはフェラチオが、何よりも好きな女であつた。大黒は、逆らわず、為すがままだ。ヴァンパイアの怪力の前には無力であつた。二十センチほど身長差があるシーナには、大黒の数十倍の腕力があつた。ライオンより遥かに危険な存在であつた。

しかし、不思議なことにシーナは、大黒に対して粗暴な表情を見せることは無かつた。大黒はかなり痛めつけられることを覚悟していた。大浴場での死闘の際に、命を助けられたことを、感謝しているのかも知れない。

再び、絶頂が迫っていた。大黒は、シーナの金髪を鷲掴みにして背筋を反らせ果てた。シーナは喉を鳴らしながらすべて飲み込んだ。

「お腹空かない？」

シーナが大黒の顔を見上げた。

「少し空いたようだ」

「ちよっと待っていて」

シーナはそう言い残して全裸のまま、部屋を出ていった。鍵をかけることは忘れなかった。大黒はキレイに掃除が行き届いた部屋を見渡した。窓には、鉄格子が嵌められ、外から厚い板によつて塞がれていた。脱出は不可能に思われた。一時間後、扉が開きキャスター付きテーブルを押すシーナが現れた。

テーブルの上には、鉄皿に載せられたステーキがジュウジュウと音を立てていた。大きなサラダボールには、山盛りの野菜サラダが満たされていた。

シーナはそれらを、キッチンコーナの食卓テーブルに並

べた。二人は、向かい合って座った。二人とも全裸のままだ。

「食べましょう」

「こいつは豪勢だな。捕虜には冷や飯が相場だと思っていた」

「貴方は特別よ」

「何が？」

「今は私だけのものよ」

「今はか……」

大黒は、ナイフとフォークを手にした。一口大に切り取った肉塊を口に入れた。

「何の肉だ？」

これまでに口にしたことのない豊潤な味わいだった。

羊肉と牛肉をミックスしたような感じであつた。肉質は柔らかく口の中で脂身が蕩けた。いくらでも食べることができそうだった。

「不味い？ただの牛じゃない」

「いや。これまで食べた中で一番美味しい」

「そうお。良かった。気に入ってくれて」

二人はワインを飲みながら、ステーキ肉を味わった。

シーナが長い足を伸ばし、大黒の股間を弄った。

「こっちに来て」

大黒はシーナの横に立った。男根がちょうど顔の位置にあつた。シーナはそれを咥え込み満足そうな笑みを浮かべた。巧みな舌技によつて再び、快感が湧きあがつた。

数分後、大黒が喘ぎ声をあげ、背筋をそらした瞬間に、

シーナは男根を吐き出し、噴出する精液をサラダに振り掛けた。シーナはテーブルの上に横たわり、余韻に浸る大黒の男根を扱きながら、サラダを食うように食べ始めた。

美佐子は薄暗い部屋で目覚めた。ベッドに仰向けに寝かされており、手足は特殊合金製の鎖によって拘束されていた。両足は大きく開ききっていた。鎖の長さに余裕があるので、多少は動かすことができた。股間に何者かが張り付き、膣を舐めていた。

「やっとお目覚めか？」

声に聞き覚えがあった。

「俺だよ。久しぶりだな。美佐子。随分と探したぜ」

男が、愛液に濡れた顔をあげた。鬼頭組の副組長、鬼頭龍司であつた。白いワイシャツを着て、ズボンを履いていた。

「私はあんたになんか用は無いわ」

「三年ぶりの再会じゃねえか。元恋人につれない言い方だね。……こっちは大有りなんだよ。よくも組を潰してくれたな。これからたつぷりとお札をしてやるぜ」

龍司は残忍な笑みを浮かべながら透けるように白く豊かな乳房に顔を近付けた。木目細やかな素肌に、血管が薄っすらと浮かび上がっていた。舌先で乳首を転がし、口に含んだ。乳首の根元を、齒と齒で挟み込み、ガチリと噛み合わせた。

「うっ……」

美佐子の裸体が大きく跳ねた。龍司はかまわずもう一方の乳首も噛み切った。味合うように口を動かし、ごくりと飲み込んだ。噛み切られた乳首が、見る間に再生していった。

「一度、これをやってみたかったんだよ」

今度は、下腹部に顔を近付けた。

「堪らないね。この匂い。本当に懐かしいよ。俺はお前のオマ＊コの匂いが大好きなんだ」

陰毛を舌でかき分け、クリトリスを舐り出した。ジュルジュルと吸い出し、根元から食いちぎった。

「ギャー！」

鮮血が溢れ出し、すぐに止った。見る間にクリトリスが再生した。

「便利なものだ。お前を飼ってみたくなったよ。毎晩、その美味そうなケツや太腿やおっぱいを調理して食べるんだ。翌朝には再生しているだろうからな。餌はこいだ」

龍司は、ズボンのベルトに差していたコルトガバメントの銃口を、美佐子のコメカミにあてながら、顔に跨り、剥き出しにした男根を口に押し付けた。

「舐めるんだよ」

コルトを強く、コメカミに押し付けた。美佐子は、仕方なく異臭のする男根を飲み込んだ。少し前まで、美佐子の肉体を弄んでいたためか、射精寸前の状態であった。美佐子の舌が絡んだだけで暴発した。

「全部飲みめ！」

美佐子は龍司を睨みあげながら、すべて嚥下した。今度は美佐子の尻の下に手を差し込み、アヌスを舐り始めた。視線は盛り上がった乳房に釘付けになっていた。射精したばかりの男根が再び堅くなった。

「もう一回、抜いておくか」

独り言を言い、美佐子に覆い被さっていった。真珠を入れた男根をずぶりとといった感じで膣に挿入し、鷺掴みにした乳房を舐めながら腰を動かした。美佐子も執拗な舐りのために、感じ始めていた。龍司の動きが激しくなった。美佐子が上り詰める前に中に放出した。膣から龍司の精液が零れ落ちた。

「お前を逝かせる訳ないだろう」

龍司は、剥き出しにした男根を、美佐子の顔に向けた。

少しして先端から小便が勢いよく噴き出し、美佐子の顔を汚した。顔だけでは飽き足らず、全身に注ぎかけた。

「もう止めて！」

美佐子が啜り泣きを漏らした。龍司は、棚の上から、長さ三十センチほどのドスを取り出し、無造作な感じで膣を貫いた。

「ギャー！」

絶叫を發し、白目を剥いて失神した。

「雌豚め。いい様だぜ」

一言言い残し、部屋を後にした。

午前十時五分前、捕虜の女達がそわそわしだした。五分後、大浴場にパトリシアが現れた。女達を物色し始め

た。女達は、恐怖の表情を浮かべ、一塊になって震えていた。パトリシアが、その中からOLの香子を、引きずり出した。

気品のある顔立ちをしていて、色白で背が高く、腰の位置が驚くほど高かった。乳房や尻の膨らみも申し分無い。

パトリシアは、泣きながら命乞いをする香子を引き摺り、大浴場を出ていった。女達は、ほっとした表情を浮かべ、二人の後ろ姿を見送った。この時間、パトリシアに連れて行かれた女は二度と戻ることは無かった。

香子はパトリシアの寝室の隣にある処置室に連れて行かれ、大量の浣腸を施された。陰毛を剃られ、ボディソープを使って身体中を洗われた。その後、パトリシアによって、口や手で、散々犯された。失神するまで蹴ら

れ意識が朦朧とする状態で、処置室から連れ出された。

その棟にあるサムソンの部屋に向かった。途中、マリアと出会った。首輪を嵌められた美佐子が後ろで、四つん這いになっていた。

「おはよう。マリア」

「おはよう。サムソンの餌？」

「そうよ。今日は生で食べたいんだって。どう？このオツパイ美味しそうですね」

パトリシアが呆然と立ち尽くす香子の重たげな乳房を掴んだ。

「そうね。何だか生唾が出てきたよ」

マリアは、香子の膺に指先を入れ、中を掻き回した。

「マリア。こいつを置いてきたら、美佐子を抱きたいん

「だけど」

美佐子の尻に、妖しい光を浮かべた視線を絡ませた。

「いいよ。美佐子。パトリシアに挨拶しな」

美佐子は四つん這いになって、パトリシアに近付いた。アヌスに差した犬の尻尾を振った。パトリシアの足が動いて、美佐子を床に転がした。股の間に顔を入れて、激しい勢いで膣を舐めた。

「うん。いい味だ。匂いも最高だね」

「部屋で待っているよ」

パトリシアは、二人の後ろ姿を見送った。

「さあ。ぼさっとしていないで。行くよ」

パトリシアは、虚ろな表情で佇む、香子の股間を驚掴みにした。

「サムソンがお待ちかねだよ」

パトリシアの瞳が赤く燃え上がり、香子の目を覗き込んだ。

部屋でサムソンは、食卓テーブルに付き、巨大なナイフとフォークを握り締め、じっとドアを見詰めていた。

グーグーと腹の鳴る音がした。若い女の匂いを嗅ぎ付けていた。まっすぐ部屋に向かってくるのがわかった。ドアが開いて、全裸姿の香子を伴ったパトリシアが現れた。

「お待たせ。お腹空いたでしょう？」

「ああ。あんまり遅いんで、自分の肉を食おうと思ったぜ」

サムソンが笑えないジョークを飛ばした。

「さあ。香子。あの犬男の前に、銀の皿があるわよね。

貴方は、そこに行って皿の上に、うつ伏せになるのよ」

パトリシアが、香子の耳の側で囁くと、まるで夢遊病

者のように前に進み始めた。巨大なサムソンを前にして

も、恐怖にかられることは無かった。完全に、パトリシ

アの術中にあつた。

「おいで。おいで」

大量の涎を流したサムソンが、ナイフを持った手で、

しきりに招いた。香子がテーブルの上に上がり、巨大な

皿の上に横たわった。盛り上がった白い尻にサムソンの

涎が降り注いだ。

「さようなら。香子」

パトリシアは一言残し、部屋を後にした。香子の尻を

食い入るように見詰めていたサムソンは、ナイフとフォークを放り投げ、太腿と背中を押さえ、乱杭菌が林立する大口を開けて齧り付いた。

「ギャー！」

それに続いてバキバキと骨を噛み砕く音とムシヤムシヤと肉を噛み裂く音が、響き渡った。

部屋につくなり、マリアは四つん這いの美佐子の腹を蹴って、仰向けに転がした。太腿を押し広げ、狂ったような勢いで膣を舐め始めた。

「お願い。もっと優しくして……」

「生こくんじゃないよ。家畜の分際で。食らっちゃまうよ。

さあ、自分で乳を揉んで、オマ＊コを弄りな」

美佐子は、言われるままに自慰を始めた。

「いい調子だね。ほらもつと股を開きな」

マリアは、股間に顔を近付け、血走った目付きで美佐子の指先を見詰めていた。美佐子は、嬲られながら、疼くような快感を覚えていた。このまま、獣のように犯されて、食われてみたいという暗い欲情が湧きあがった。

「お姉さま。美佐子のオマ＊コ食べて……」

マリアは美佐子の手を乱暴に払い除けて、臍に食らい付いた。そこは愛液で濡れ濡れになっていた。

「ほら。こんなにオツユが出ているよ。舐めてあげるね」

「ああ……。いい……。死んじゃう！」

美佐子はマリアの頭を、股間に強く押し付けた。

「いく……。いっちゃう！」

美佐子は四肢を突っ張るようにして果てた。

「誰がいつていいと言ったんだい！」

膣に指を入れて、乱暴に中を掻き回した。

「痛い。お姉さま許して！」

「そこに四つん這いになるんだ！早くしないか」

ノロノロとした動きで四つん這いになった美佐子の尻に乗りかかり、ズブリといった感じでアヌスに張形を挿入した。

「うっ……」

マリアは、脳が爛れるほどの欲情を押さえ切れなかった。今は、張形ではなく、本当の男根が欲しかった。この美味しそうなお尻を、貫き思う存分に犯し、男のように中に欲望の液体を放出したかった。重たげな乳房を乱

暴に揉みしだきながら、獣のように美佐子を犯した。激しい快感のためか、美佐子は髪を振り乱し、声を限りに泣き叫んでいた。途中で美佐子は四肢を突っ張り、気を失った。それでもマリアは美佐子を開放しなかった。失神した美佐子を仰向けにして、正上位で犯し始めた。額に汗をかき、目には憑かれた様な光を浮かべていた。

その日の夕方、マリアは自室で、若く美しい女を、張形で背後から犯していた。佐々木エリ、今年で二十歳になる学生だった。マリアが以前から目をつけていたほど、可憐で美しい容姿を持っていた。すぐ近くの床の上では、パトリシアが美佐子の、臍とアヌスにフィストファックを行っていた。パトリシアの手が深く食い込むたびに鋭

い喘ぎ声をあげ、愛液を迸らせていた。美佐子は、股間から湧き上がる激しい快感のために、忘我の状態にあった。美しい眉間に皺を寄せ、口元から、涎を流していた。尻の下には小水の水溜まりができていた。

マリア達が女達を犯し始めてから、半日が経過しようとしていた。激しい愛撫のために、エリはかなり消耗していた。何度いかされたかわからなかった。いっても、いっても、マリアは許してくれなかった。膣が擦り切れないように、張形の男根にオリーブオイルを塗っていた。マリアは、エリを今夜の夕食とすることに決めていた。このまま、犯し続けて、犯り殺すつもりでいた。後、数回、絶頂に導けば、エリの心臓は、鼓動を止めることだろう。

三十分、エリはマリアに尻を犯され、乳を揉まれながら絶頂を迎えようとしていた。度重なる陵辱のために体力が尽きかけていた。心臓に激しい動悸を覚えた。エリの心臓が停止しようとしたその時、マリアは背後から首筋に食らいつき、頸動脈を噛み切った。苦痛は感じなかった。脳裏に凄まじいスパークを発生し、ストンといった感じで深淵の闇に落とされた。

「血抜きは　OKのようね」

パトリシアが床に横たわるエリの死体を覗き込んだ。

「オーブンで丸焼きにしてちょうだい。貴女も食べる？」

「もちろん。腕によりをかけて料理するわね」

「お願いね。できたら呼んでね。私は一眠りするから」

パトリシアがエリの死体を軽々と担ぎ上げ、部屋を出

ていった。マリアは失神し、床に横たわる美佐子を、抱き上げベッドに寝かせた。その隣に横たわり、美佐子の肩を抱いて目を閉じた。人質となっていた女達は、ほとんどが殺されていた。サムソンだけでなく、ヴァンパイア化した女達十人の食欲は凄まじく、毎日のように、人質の女の血を吸い、その肉を食らった。いくら食べても太ることはなかった。

女達は、暇さえあれば、生け贄となった女を、調理道具が整えられた自室に連れ込み、指や口や様々な道具を使い、散散に犯した挙げ句、最後には血を吸い尽くし戮り殺した。その後、犠牲者の肉を様々な方法で調理し堪能した。

第三章 極上の美味

地下の一室では、大黒、美佐子そして、マリアの三人が食卓用テーブルに付いていた。三人とも一糸も纏わぬ全裸姿であつた。室内は裸でも、寒さを感じない程度に暖められていた。テーブルの上には、皮を剥いたニンニクを盛った皿と、オリーブオイルのボトルそれに粗塩とコショウのビンが置かれていた。

美佐子はマリアの膝に抱きかかえられていた。首には特殊合金製のベルトが巻かれ、それは、コンクリート製の床から伸びた鎖に繋ぎとめられていた。大黒は自由だった。毛を剃られた睾丸が寒々しかった。マリア達ヴァンパイアにとって、生身の人間である大黒の存在などは脅威にはならないのであろう。

先ほどから、ジーという低いモータ音が、美佐子の下半身から聞こえていた。膣とアヌスに小型のバイブレータを入れられていた。美佐子は、惚けたような表情を浮かべ、時折鋭い喘ぎ声を漏らした。マリアが美佐子の盛り上がった乳房を手の平で弄んでいた。

「お前、仲間をひとり殺してくれたそうだね。そのお礼として、極上の雌豚料理をご馳走してあげるよ」

「真由美は生きているのか？」

大黒が、マリアの顔を睨み付けた。

「今来るから心配しなくていいよ」

その時、スチール製のドアが開き、首に鎖を掛けられ四つん這いになって歩く真由美が現れた。調理係のパトリシアがその鎖を持って、後ろから続いてきた。その後

に、三人の女達が、ついてきた。さらに、鬼頭組の副組長、鬼頭龍司が、一抱えもあるバーベキュー用コンロを抱えて来た。それをテーブルの上に置いて、部屋を出て行った。去り際に美佐子の裸身を舐めるような視線を見た。コンロには赤々と燃える炭がくべられていた。真由美は一糸も纏わない全裸姿であり、膣には巨大なバイブレータが挿入され、アヌスには豚の尻尾を模したバイブレータが挿入されていた。女達は、部屋の壁に佇み、美佐子や真由美の裸身を舐めるように見詰めていた。

パトリシアは真由美の裸身を、軽々と抱えあげ、テーブルの上に横たえた。寝ても崩れない豊かな乳房を、マリアがじっと見詰めていた。真由美は大黒や美佐子を見ても無表情のままだった。激しいセックスの後の気だる

い表情をしていた。

「随分と可愛がったようだね」

乳房や太腿には、幾つものキスマークが付けられていた。

「ちゃんと処理したかい？」

「もちろんよ。十回も浣腸したんだから。この女、相当淫乱だよ。その度に氣をやっていたから」

パトリシアが答えた。

「お前も楽しんだんだろう？」

「もち」

パトリシアは美佐子の方をちらりと見た。

「焦るんじゃないよ。食事が済んだら、この女も食わせてあげるよ。さて、始めるかい」

パトリシアは、真由美の横に、バーベキュー用コンロを置いた。それから、真由美の膾とアヌスに挿入されていたバイブレータを抜いた。

「真由美。これからお前を料理する。いいね」

「はい。マリア様。美味しく食べてください」

真由美が惚けたような表情で答えた。囚われの身となつてから、真由美は蛇を使った蹴りによって陵辱の限りを受けていた。絶え間の無い性的な拷問と、蛇に対する恐怖心のせいで自我を失っていた。

「どこを食べて欲しい？」

真由美はゆっくりとした動作で、テーブルの上に四つん這いになり、マリアに尻を向けた。目の前に、悲しくなるほど美しい尻が据えられた。サーモンピンクの膾と

アヌスには透明な愛液が滲んでいた。マリアは、美佐子を抱いたまま、指先を愛液に浸させ、口に含んだ。若い女の素晴らしいエキスが口内に広がった。

「真由美のお尻とオマ*コ……」

消え入るような小さな声で呟いた。

「わかったよ。おっぱいも食べてあげるからね。そうだよ。お前の極上の太腿で生ハムを作ろうかね」

マリアは真由美のアヌスを弄りながら、ごくりと生唾を飲み込んだ。

「そうだ。美佐子。お前も真由美のオマ*コを舐めてあげな」

美佐子はマリアに抱きかかえられたまま、身体の向きを変え、真由美の尻に顔を押し付けた。ピチャピチャと

厭らしい音を立てて、真由美の膣を舌先で舐り始めた。

「ステキよ。美佐子。もっと奥も舐めて！」

真由美が尻を淫らに振りながら催促した。美佐子は真由美の両乳房を手で揉みしだきながら舌先を尖らせ、アヌスに突き入れた。マリアも目の前に据えられた美佐子のすべすべの尻を美味しそうに舐めていた。美佐子の膣とアヌスに挿入されていたバイブレータのパワーをあげた。

「ああ……。マリア様……。よすぎる！」

美佐子は小波のように寄せては返す快感に身を焦がしながら、真由美の膣やアヌスに指先をのめり込ませ、激しい注送を繰り返した。

「逝く。い……。逝っちゃう！」

「逝くのよ。真由美。ああ……あたしももう駄目……ああ……いい……」

ふたりは、背筋を仰け反らし同時に果てた。

「美佐子。ぼさつとしていないで、真由美のオマ＊コとケツにニンニクを詰めるんだよ」

マリアは、真由美の尻に顔を載せ、余韻に浸っている美佐子に命令した。美佐子はよろよろと起き上がり、傍らに置いてあったニンニクの皿から、数十個を、真由美のアヌスと膣に詰め込み始めた。ニンニクを入れるたびに、真由美は眉間に皺を寄せて、低い喘ぎ声をもらした。すべてを入れた後、今度はオリーブオイルを手の平にたっぷりと付けて、真由美の尻と膣に塗りたいくった。アヌスにも丹念に塗り込んだ。

「いい……」

アヌスに指先が滑り込む度に喘ぎ声をあげた。最後には、マリアが粗塩とコショウを尻と膣に振り掛けた。壁際で見えていた女達が近付き、真由美の四肢を掴んで、宙に持ち上げ、円形コンロに尻を載せようとした。その時、ボタンという音を立てて椅子が転がり、大黒が立ち上がった。

「いい加減にしねえか！ テメエラ」

両腕に筋肉の瘤が浮き上がった。マリアに近付こうとしたその時、マリアの両目が真っ赤に燃え上がった。大黒の視線を赤い閃光が貫いた。全身に力が入らず、身動きができなくなった。強力な催眠術の配下にあった。

「そこでじっとしているんだね」

美佐子は惚けたような表情を浮かべ、天井を見上げていた。目元から一滴の涙が零れ落ちた。バイブレータに代わり、マリアの指が膣やアヌスに入れられていた。

「始めるよ」

マリアの号令で、真由美の尻が円形コンロの上に載せられた。絶叫が湧き上がり、真由美の裸身が跳ねた。手足を動かし女達の手を振り放そうとしたが、どうすることもできなかった。苦しそうな呻き声をあげ続けた。尻が焼ける激痛のせいで自我が戻りかけていた。



「助けて！達也。お願い」

部屋中に、肉の焼ける香ばしい匂いが立ち込め始めた。

尻は、赤々と燃える炭に焼かれていた。肉汁が落ちるた

びにジュジュという音がした。真由美はコンロの上に座った格好で、女達によって四肢を押さえつけられていた。極上の美女が、大黒達の目の前で生きたまま料理されていた。

「ヴァンパイア料理は、これだから堪らないね。人間だったら発狂しているところだよ」

マリアは、刷毛でオリーブオイルを膾や尻に塗り込んだ。

「ほう。いい具合に焼けてきたよ。今はケツとあそこだけ焼くからね。さっきも言ったように太腿は生ハムにするよ。オツパイはシチューに入れようかね」

それから一時間かけて、じつくりと真由美の尻は焼かれた。真由美は発狂することもなく生きていた。限界を

超えた激痛のために神経が麻痺しているようで、空ろな表情を浮かべていた。真由美がコンロから降ろされ、野菜や果物が盛り付けられた巨大な銀製の皿に、うつ伏せの姿勢で盛り付けられた。豊かな尻は、きれいなキツネ色に焼きあがっており、湯気をあげていた。辺りには、食欲を刺激する香ばしい匂いが立ち込めた。給仕役のパトリシアが、鋭い切っ先を持った肉切り包丁で、真由美のきれいに焼きあがった尻に切れ目を入れた。中は半分のレアの状態で、肉汁がこぼれ湯気が立った。一口大の大きさに切り取った肉片をマリアの皿に載せた。

「ほう。ちょうどいい具合に焼けたね。……美味い！最高だよ。大黒さんにも食べてもらおうかね」

パトリシアが、大黒と、美佐子の分を切り分け、皿に

盛り付け、二人の前に置いた。

「どうしたの？冷めちゃうよ。熱いうちに食べなよ」

大黒は、目の前に置かれた尻肉と、テーブルの上で寝かされ、尻肉を切り取られている真由美を憑かれたように交互に見詰めた。真由美は、目を閉じ、息苦しそうにしていた。マリアがパトリシアから肉きり包丁をもらい美佐子の乳房に押し付けた。

「言うことを聞かないと、こいつのおっぱいを、食わせるよ」

美佐子は目を閉じて、じっと耐えていた。包丁の切っ先があてられた部分から血球が零れ落ちた。

「真由美。済まない……」

大黒は、真由美の尻肉を手掴みで口に入れた。得も言

えぬ豊潤な肉汁が口内に広がった。最上級の牛のヒレをさらに、上品に仕上げた感じだ。ゆつくりと噛み締め、飲み込んだ。

「いい調子だよ。お前達も食べていいよ」

それを聞いて、テーブルを囲むようにして見ていた女達が、一斉に動いた。

我先にと、テーブルの上でうつ伏せに横たえられた真由美の尻に、殺到した。

ナイフやフォークを使うものはいなかった。両手で腿と背中を掴み、獣のように直接尻肉を食いちぎった。肉を咀嚼しながら恍惚の表情を浮かべていた。

尻の肉をあらから食い終えてから、パトリシアが真由

美を裏返しにした。膾が見えるように両足を立てた。マリアが大黒の腕を掴み、その間に座らせた。

「いい具合に焼けているね。最初の一口は、お前に譲るよ」

大黒の頭を真由美の股間に押し付けた。豊潤な肉の匂いで気がおかしくなりかけていた。

「どうした。食べないのかい？」

頭を押さえていた手が離れた。マリアは包丁を手にして、美佐子の方に移動しようとした。大黒はゆっくりと顔を上げた。真由美と視線が合った。真由美は吸い込まれそうな澄んだ目をしていた。

「達也。いいのよ。私はもう助からない……。あたしのお肉を食べて……貴方に食べて欲しいの」

大黒は、無言で頷き、真由美の膾肉に食らいついた。

「ああ……。感じるわ。貴方に食べられているのね。美

味しい？」

「ああ……。最高に……」



大黒の目から光るものが落ちた。

「三文芝居は、もう沢山だよ。パトリシア。真由美の首

を刎ねな！」

パトリシアが真由美の近くに移動し、大振りの中華包丁を振り上げた。

「さよなら。達也。美佐子、皆に……」

ストーンという包丁がテーブルを打つ音と共に真由美の頭が、床に転がった。

その時、ドスンという地響きが起こり、続いてガツンという大音響とともに天井が崩れ落ちた。天井にできた大穴から、ヘリコプターが急降下してくるのが見えた。銀色に輝く機体から、数発の火線が放たれた。空対地ミサイルであった。近くに飛来し、爆音がして建物の一部を吹き飛ばした。

「地下に非難するんだ。誰か大黒を捕まえて！」

美佐子を羽交い締めにしたマリアが、叫んだ。シーナが大黒の身体に向けてジャンプしたその時、天井から爆音がしてシーナの身体が真ん中から二つに裂けた。間髪を入れず、黒い影が飛び降りて来た。M i s a k o スペシャルで武装した美由紀であった。美由紀は周囲に向けて、五十口径ライフル弾と四十ミリグラネードランチャーを乱射した。テーブルやソファ等の家具類が粉々に粉砕し、コンクリート製の壁に大穴が穿たれていった。何人かのヴァンパイアに着弾し、頭部や腹部を引き裂いた。室内は、致命傷を負ったヴァンパイア達のあげる断末魔や爆音で、目眩がするほどであった。美由紀が、全裸で呆然と立ち尽くす大黒を、片手で軽々と抱き上げ、壁にできた大穴に向かって疾走した。

屋外に飛び出す寸前、大黒は、マリアに引き摺られるようにして連れ去られる美佐子を確認した。

「美佐子！」

「美由紀！達也を逃がして！お願い……」

美佐子の叫び声は、瓦礫が崩れ落ちる音で、かき消された。

「美佐子！」

大黒は声を限りに叫んでいた。美由紀は、大黒を抱えたまま時速八十キロ以上のスピードで構内を走り抜けた。

突然、黒い巨大な影が、行く手を塞いだ。両目を爛々と燃え上がらせ、口が耳元まで裂け、乱杭歯を剥き出したサムソンが、両手を広げて立っていた。

美由紀は、大黒を片手で抱えたまま、M i s a k o s へ

シャルをサムソンに向けて乱射した。サムソンが唸り声を発しながら、銃弾を避けるようにジグザクに凄まじいまでの速度で向かってきた。早い！美由紀の反射神経を保持してても捕捉することはできなかった。爆撃音がして、二人の身体が激突した。美由紀は三十メートル以上も吹き飛ばされ、放物線を描いて地面に叩き付けられた。美由紀はサムソンの体当たりを受ける直前に、大黒の身体を地面に転がしていた。地面に横たわる大黒は、無視して、何とか立ち上がろうともがいている美由紀に向かって歩き始めた。

サムソンは、美由紀の両手を片手で掴みあげ、着いた戦闘服を紙のように引き裂いた。下着は身に付けていなかった。極上の裸体が剥き出しとなった。乱杭齒から

大量の唾液が零れ落ちた。大口を開け、まさに乳房を食いちぎろうとしたその時、爆撃音がしてサムソンの左肩から血しぶきが上がった。

サムソンの後方三十メートルの地面に M i s a k o スペシャルを抱えた大黒が横たわっていた。五十口径ライフル弾を連射した衝撃は凄まじく、肩の骨が外れていた。サムソンは気を取り直し、再び美由紀を食らおうと、大口を開けた。上空から空対地ミサイルが飛来して、サムソンの背後で爆発した。美由紀の裸身を手放したサムソンの身体が、大きな放物線を描き吹き飛んだ。工場の一棟に突っ込んだ。コンクリート製の建物が、衝撃で半壊した。一瞬の後、美由紀がよろよろと起き上がり、地面でもがいていた大黒を抱き上げた。

その時、半壊した建物の瓦礫が飛び散り、中からサムソンが脱兎のごとく飛び出してきた。大黒を片手で抱きかかえた美由紀に向かって突進した。美由紀がもう一方の手を、頭上に高高と伸ばした。サムソンの体当たりを食らう寸前、フックの付きのワイヤーロープを垂らしたヘリコプターが、地上すれすれに飛来した。美由紀の手がフックを掴んだ。ガツンという衝撃とともに二人は、一気に空中に飛び上がった。

地上では、獲物を取り逃がしたサムソンが座り込み、悔しそうに、アスファルトが敷かれた地面を拳で叩いていた。時折、怨嗟のこもった咆哮をあげた。

「圭吾！大黒さんが怪我をしたわ」

機内では、美由紀に抱かれた大黒が、後頭部から血を

流し苦しそうに呻き声をあげていた。近藤が、傷口を調べ始めた。テキパキとした手際で傷口を縫い合わせた。何とか出血は収まった。

「何か鋭いもので、引つかれたような傷ができています。脳まで達しているかも知れない」

いつになく重々しい声で言った。

「飛び上がる直前に、オーグルの鉤爪を受けたんだわ」

美由紀は涙声になっていた。

「お前の所為（セイ）じゃない。お前はよくやった」

「真由美は殺されたわ。美佐子も助けられなかった。や

つと助け出した大黒さんが……」

近藤が、下を向いて泣き崩れる美由紀の肩を抱いた。パイロット席には、若い女が座っていた。手足が長くグ

ラマーな肢体を持ち、モデルといっても通用するような美しい顔立ちをしていた。大黒と近藤の知り合いで、幸田亜矢という名前であつた。一年ほど前に、美佐子達との闘争の中で知り合つた。

「大黒さん大丈夫なの？」

パイロット席の亜矢が、尋ねた。

「俺にもわからない。知り合いの脳外科医にみせるつもりだ」

「で、何処へ行くの？」

「今考えている」

「病院へは行かないの？」

「病院か……。警察が丁重に看病してくれるだろうが、奴等の標的になるだけだ」

亜矢はへりの鼻先を、南に向けた。

第四章 潜伏

第五章 大暴走

第六章 復讐

完